長谷川貞信「盂蘭盆会七墓巡り之図」（『郷土研究　上方』より）

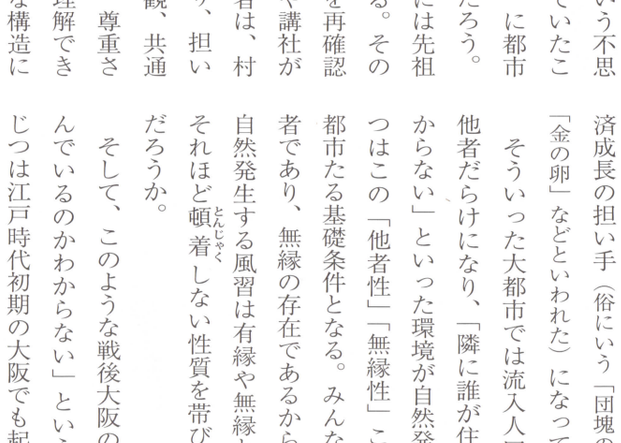
曲と共に巡ったそうで、これは『郷土研究　上方』の挿絵「盂蘭盆会七墓巡り之図」（長谷川貞信。上図参照）を見ても、陽気な一団が街中を練り歩いている様子がうかがえる。

供養というよりは一種の演芸、遊興、娯楽のような晴れやかな雰囲気が感じられ、現在でいえば「盆踊り大会」のようなものに近い。筆者も子供の頃に盆踊り（先祖供養）よりも屋台が楽しいと思った記憶があるが、七墓巡りも無縁仏の供養を一種の大義名分にして、町衆のレクリエーション、エンターテイメントといった要素が強かったように思われる。

また、夏の暑い盛りであるので、七墓も徒歩だけではなくて舟を使って巡っていたと思われる。江戸時代の大阪はどこにでも川が張り巡らされていたし、芸妓衆を共にして、優雅に舟遊びをして、一種の肝試し、余興として七墓を巡るような連中もいたのではないだろうか。

実際に、筆者は大阪七墓巡り復活プロジェクトで毎年、七墓を巡っているが、総距離は二〇キロを優に超える。徹夜で歩いたこともあるが、これはかなりの苦行で、参加者はどんどんと脱落していき、最初は五十名ほどいたのに、ゴールする頃には十五名ほどに減っていた。昔の人は健脚だったというが、二〇キロの距離は、さすがに酒などを飲んで巡れる距離ではない。やはり舟なども使って、悠々自適に巡っていたと思われる。

ちなみに七墓巡りの参加者がどれぐらいいたのか？　その数なども不明だが、七墓の一つである南浜墓地近くの浄土宗寺院・源光寺境内には「七はか道」と刻まれた貴重な石碑が現存している。こうした案内の石碑が必要なほど、大勢の参加者が七墓を巡った……ということなのかも知れない。



大阪七墓巡り復活プロジェクト・七墓ツアー（写真提供：陸奥氏）

三、無縁仏には夏の陣の死者が含まれる？

さて、こうした「無縁仏の供養」という不思議な風習が、江戸時代の大阪で成立していたことは非常に興味深いが、これはまず第一に都市という「場」（トポス）の影響が大きいだろう。

例えば、村落の風習などは、基本的には先祖代々の土地に生きる人々の中で育まれる。その風習の多くは有縁の村落社会の繋がりを再確認する仕組みとして機能している。宮座や講社があったりして、外部の者、余所者、他者は、村の神輿や山車、太鼓などには触ったり、担いだりはできない。有縁の、同一の価値観、共通の世界観の持ち主だけが許容されたり、尊重されたりして、無縁の、異なる価値観や理解できない世界観の他者には、自然と排他的な構造になっていることが多い。

しかし都市はそもそも無縁の人々の集まりで構成される。戦後の日本社会でもベビーブームを迎えて爆発的に人口が増えたが、長男は家や田圃を受け継ぐが、次男、三男などは受け継ぐ家や田圃などはなかった。結果として長男以外の息子や娘たちは、夜行列車に乗って、東京や大阪、愛知といった大都市に移住して、高度経済成長の担い手（俗にいう「団塊の世代」。当時は「金の卵」などといわれた）になっていった。

そういった大都市では流入人口が多いので、他者だらけになり、「隣に誰が住んでいるかわからない」といった環境が自然発生するが、じつはこの「他者性」「無縁性」こそが、都市の都市たる基礎条件となる。みんな同じような他者であり、無縁の存在であるからこそ、都市で自然発生する風習は有縁や無縁ということに、それほど頓着しない性質を帯びるのではないだろうか。

そして、このような戦後大阪の「隣に誰が住んでいるのかわからない」という社会状況は、じつは江戸時代初期の大阪でも起こった。ご存